

[B年] 聖霊降臨節第21主日(2026年10月11日)**【旧約聖書日課】ダニエル書 3章13～26節**

¹³これを聞いたネブカドネツアル王は怒りに燃え、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来るよう命じ、この三人は王の前に引き出された。¹⁴王は彼らに言った。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、お前たちがわたしの神に仕えず、わたしの建てた金の像を拝まないというのは本当か。¹⁵今、角笛、横笛、六絃琴、竪琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器の音楽が聞こえたと同時にひれ伏し、わたしの建てた金の像を拝むつもりでいるなら、それでよい。もしも拝まないなら、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。お前たちをわたしの手から救い出す神があるのか。」

¹⁶シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツアル王に答えた。

「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。¹⁷わたしたちのお仕える神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。¹⁸そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。」

¹⁹ネブカドネツアル王はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴに対して血相を変えて怒り、炉をいつもの七倍も熱く燃やすように命じた。²⁰そして兵士の中でも特に強い者に命じて、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを縛り上げ、燃え盛る炉に投げ込ませた。²¹彼らは上着、下着、帽子、その他の衣服を着けたまま縛られ、燃え盛る炉に投げ込まれた。²²王の命令は厳しく、炉は激しく燃え上がっていたので、噴き出る炎はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴを引いて行った男たちをさえ焼き殺した。²³シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は縛られたまま燃え盛る炉の中に落ち込んで行った。

²⁴間もなく王は驚きの色を見せ、急に立ち上がり、側近たち尋ねた。

「あの三人の男は、縛ったまま炉に投げ込んだはずではなかったか。」

彼らは答えた。

「王様、そのとおりでございます。」

²⁵王は言った。

「だが、わたしには四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている。」

²⁶ネブカドネツアル王は燃え盛る炉の口に近づいて呼びかけた。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは炉の中から出て来た。

【使徒書日課】使徒言行録 5章27～42節

²⁷彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。²⁸「あの名によって教えるはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」²⁹ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。³⁰わたしたち

の先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。³¹神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。³²わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」³³これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。³⁴ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、³⁵それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いには慎重にしないさ。³⁶以前にもデウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。³⁷その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりちりにさせられた。³⁸そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、³⁹神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、⁴⁰使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。⁴¹それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、⁴²毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章53～65節

⁵³人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。⁵⁴ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。⁵⁵祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。⁵⁶多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。⁵⁷すると、数人の者が立ち上がって、イエスに不利な偽証をした。⁵⁸「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」⁵⁹しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。⁶⁰そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」⁶¹しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。⁶²イエスは言われた。「そうです。」

あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」

⁶³大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。⁶⁴諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。⁶⁵それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみる」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

ダニエル書 3章13～26節

¹³そこで、ネブカドネツァルは怒りに燃え、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来るように命じた。三人は王の前に連れて来られた。¹⁴ネブカドネツァルは彼らに言った。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、お前たちが私の神々に仕えず、私の立てた金の像を拝まないというのは本当か。¹⁵今、もしお前たちが、角笛、横笛、琴、堅琴、三角琴、風琴、その他あらゆる楽器の音を聞くときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよい。しかし、もし拝まないならば、直ちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。私の手からお前たちを救い出す神とは何者か。」

¹⁶シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツァル王に答えた。

「このことについて、私があなたに言葉を返す必要はありません。¹⁷もしそうならば、私たちが仕える神は、私たちを救い出すことができます。火の燃える炉の中から、また、王様、あなたの手から、救い出してください。¹⁸たとえそうでなくとも、王様、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えることも、あなたが立てた金の像を拝むこともいたしません。」

¹⁹ネブカドネツァルは怒りに満ち、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴに対する顔つきが変わった。彼は炉を通常の七倍熱くするように命じた。²⁰また彼の軍隊の中で特に強い者たちに、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを縛り上げ、火の燃える炉に投げ込むように命じた。²¹そこで、若者たちは、上着、下着、帽子、その他の衣服を着けたまま縛られて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。²²王の言葉は厳しく、炉は大変な高温になっていたので、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来た者たちも、その火炎に焼き殺された。²³シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は、縛られたまま燃え盛る炉の中に落ち込んだ。

²⁴その時、ネブカドネツァル王は驚いて、慌てて立ち上がり、顧問たちに尋ねた。

「あの三人は、縛ったまま火の中に投げ込んだのではなかったか。」

彼らは王に答えた。

「王様、そのとおりです。」

²⁵王は言った。

「しかし私には、四人の者が縄目を解かれ、火の中を歩いているのが見える。しかも何の害も受けていない。四人目の者の姿は神の子〔別訳→神々の子〕のようだ。」

²⁶そこでネブカドネツァルは燃え盛る炉の入り口に近づき、呼びかけた。

「いと高き神の僕シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは火の中から出て来た。

使徒言行録 5章27～42節

²⁷彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。²⁸「あの名によって教えるのはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」²⁹ペトロと使徒たちは答えた。「人に従うより、

神に従うべきです。³⁰私たちの先祖の神は、あなたがたが木に掛けて殺したイエスを復活させられました。³¹神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。³²私たちはこのことの証人であり、また、神がご自分に従う人々にお与えになった聖霊も、そのことの証人です。」

³³これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。³⁴ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルと言う人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、³⁵それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしないさい。³⁶以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。³⁷その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、従っていた者も皆、ちりぢりにさせられた。³⁸そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。放っておくがよい。あの計画や行動が人から出たものなら、自滅するだろうし、³⁹神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、⁴⁰使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえ、釈放した。⁴¹それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、⁴²毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて教え（別訳→メシアがイエスであると教え）、福音を告げ知らせていた。

マルコによる福音書 14章53～65節

⁵³人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。⁵⁴ペトロは、遠くからイエスの後に付いて、大祭司の中庭まで入り、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。⁵⁵祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。⁵⁶イエスに対する偽証をした者は多かったが、一致しなかったのである。⁵⁷ついに、数人の者が立ち上がって、イエスに対する偽証をして言った。⁵⁸「この男が、『私は人の手で造ったこの神殿を壊し、三日のうちに、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、私たちは聞きました。」⁵⁹しかし、この場合も、彼らの証言は一致しなかった。⁶⁰そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか。この者たちが不利な証言をしているが、どうなのか。」⁶¹しかし、イエスは黙り続け、何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。⁶²イエスは言われた。「私がそれである。

あなたがたは、人の子が力ある方の右に座り、天の雲に來て来るのを見る。」

⁶³大祭司は衣を引き裂いて言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。⁶⁴諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう思うか。」一同は、イエスは死刑にすべきだと決議した。⁶⁵そして、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみる」と言い始めた。また、下役たちもイエスを平手で打った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月11日「聖霊降臨節第21主日」の日課主題は「忍耐」。

・旧約日課は、「ダニエル書」から、燃える炉に投げ込まれた信仰義人らの逸話箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、ペトロらが大祭司のまで取り調べられた際の扱いを伝える説話箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスが大祭司の屋敷で取り調べられた際の様子を伝える説話箇所。

旧約日課(ダニエル3章より)

・「ダニエル書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「諸書」に収められた創作時代物語文書。前半は、前6世紀中葉のバビロン捕囚期から同世紀末のペルシア支配下の時代にかけてバビロニア王およびペルシア王に仕えたユダの人ダニエルらの義人物語として展開され、また後半は、ダニエルが夢で見た幻や啓示などがまとめられている。キリスト教正典旧約では「預言書」の枠組みで扱われているが、これは「七十人訳ギリシア語旧約聖書」の区分に従ったもので、ユダヤ教では「預言書」とみなされない。なお、本書ユダヤ教正典は2:4~7:28がアラム語で記されている。古代オリエントでは、前9世紀以降、アラム語が広く行政および外交用語に用いられるようになり、前3世紀以降にギリシア語がこれに取って代えられた後も、後7世紀以降にアラビア語が台頭してくるまで、中東地域の主要な共通語として広く用いられ続けた。

・日課箇所は、本書前半の義人物語に含まれる逸話の一つ。義人物語は、ダニエルをはじめとする四人のユダ族出身の少年たちがネブカドネツアルに仕える者として召喚され、それぞれバビロニア名を与えられながら、自分たちの信仰を貫きながらバビロン王、続いてペルシア王に仕え続けた物語として構成されているが、基本的にはさまざまな逸話の寄せ集めである。日課箇所の逸話に登場する義人は、ダニエル＝ベルテシャツアルを除く3人。「ダニエル書」中でダニエル＝ベルテシャツアルが登場しないのは、この逸話のみ。元来は他の三人(シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ)の義人伝として伝承されていた逸話集から採用されたのではないかと推認する学者もいる。

・「ネブカドネツアル王」は、新バビロニア王国第二代の王として前605~562年頃に王位にあった実在の人物。ユダ王国末期の三次にわたるバビロン捕囚やエルサレム陥落の出来事がこの王のもとで起こったことから、通俗的には冷酷非道で残虐な王とみなされることがあるが、「エレミヤ書」や「エゼキエル書」は「神の僕」として描いており、批判的な言及は限定的である(「エレミヤ書」がエルサレム陥落後の預言の中で一部批判的に取り上げている)。聖書外の考古学的資料からは、同王がバビロン市の諸神殿・聖所を再建・増築することに熱意を注ぎ、支配下に置いた地から富と人材を集めたということが推認される。

他方で、「エゼキエル書」などからは、捕囚民としてバビロンに移住した者たちが独自の祭司集団を保持し、限定的ではあるが祭儀を続けていたことが推認されるが、同時に彼ら祭司がバビロンの祭儀に関与していた可能性も考えられる。おそらく、捕囚ユダヤ人らの多くは、独自の宗教をバビロンの宗教と競合しない形で保持しながらネブカドネツアル王に忠誠を示し、生き残りを図っていたのであり、日課箇所を含めた本書の義人物語で描かれるような態度で排他的に自分たちの宗教を保持しようとすることはなかったのだろう。一般に、このような態度は、前2世紀にシリア王が支配下のギリシア化を推し進めようとしたことに対して民族主義的な抵抗をした「マカベア戦争」時代の社会情勢を反映していると考えられている。

使徒書日課(使徒5章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」を描く歴史物語文書。本書の概要については、過去の資料(「聖書と祈りの会260819」など)を参照。

・日課箇所は、使徒たちがエルサレムで多くの人々の称賛を受けるようになったことに対して大祭司に連なるサドカイ派の人々が迫害に動き、逮捕して最高法院(長老会)での取り調べに引き出すことになった顛末を描く説話箇所(5:12~42)の一部。使徒らがその活動について議員らの取り調べを受けたという説話は、4:1~22にも描かれているが、そこでは、「ペトロとヨハネ」の二人だけが対象として明示されている。日課箇所の説話では、「ペトロとほかの使徒たち」という表現で物語られており、ペトロを筆頭とする使徒集団をまとめて取り上げようという意図が示される。初期エルサレム教会に対するユダヤ当局者らの取り調べおよび迫害については、続く6~7章でステファノ」に対する説話が置かれている。ただし、ステファノは「使徒(アポストロス)」ではなく「食事の世話をする者(ディアコノス)」として設定されている。

・大祭司らユダヤ当局者による取り調べや迫害の叙述は、「福音書」が「受難物語」で描く主イエスに対する裁判等の説話を敷衍したものとして解される。すなわち、主イエスの身に起こったことが、使徒たちの教会に対しても起こる、というパターンで、これにより使徒たちの教会が主イエスに従う歩みをしていたことが明らかにされる、という描き方がされていると解される。もっとも、福音書において主イエスは、大祭司の裁判でも総督の裁判でも多くを語ったようには描かれていないが、使徒たちは雄弁に主張を展開している。

・この説話の特異性は、使徒たちを事実上弁護するような立場で「ファリサイ派に属するガマリエルという人」の神学的解説が示されることである。使徒言行録は、サドカイ派を敵対的に描く一方でファリサイ派には好意的であり、パウロのこともラビ・ガマリエルの下で学んだものとして描く(22:3)。ファリサイ派からキリストに従うようになった者は少なくなかったのだろう。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「受難物語」中、主イエスが大祭司のもとで取り調べを受けたことを伝える箇所。四福音書が共通して伝えている。「マタイ」と「マルコ」は、この場面をほぼ同様に伝えているが、「ルカ」と「ヨハネ」は、この場面が付随する「ペトロの否認」の逸話を、「マタイ」および「マルコ」とは異なる配列で伝えている。「ペトロの否認」の逸話は、四福音書で共通して日課箇所の「大祭司の下での裁判」の説話と不可分のものとして構成されている。

・このときの「大祭司」について、「マタイ」「ルカ」「ヨハネ」は「カイアファ」という人物の名を特定して伝えているが、「マルコ」はその名を示していない。「マルコ」がその名を知らなかったからなのか、関心がなかったからなのか、あるいは別の理由があったのか、判然としない。「ヨハネ」は、「カイアファ」のほかに彼の舅「アンナス」の名も挙げているばかりか、彼らにある種の預言者的な役割を見いだす解釈を示している(ヨハネ 18:14←11:49～52)。また「ヨハネ」は、このときにペトロと行動を共にした使徒の「ヨハネ」が大祭司一族と親交のある者であったことを明らかにしている(ヨハネ 18:15～16)。

・56 節「立ち上がって」と 60 節「立ち上がり」は、いずれも原語「アニステーミ」。この語は、この箇所のように「立ち上がる」という通常の意味でも用いられるが(2:14、3:26、7:24 など)、「(横たわっていた者が)起き上がる」(1:35、5:42)とも訳され、日課箇所を含む「受難予告から受難物語へ」という枠組み(8～15 章)では、もっぱら「復活する」(8:31、9:9,10,27,31、10:1,3,4、12:23,35)と訳されている。「マルコ」とほぼ同様の「受難予告から受難物語へ」の展開を描く「マタイ」は、日課箇所の並行句を同じ「アニステーミ」で表現するのに対して、「マルコ」で「復活する」と訳されている箇所のほとんどを「エゲイロー」という異なる動詞で表現している。「パウロ書簡集」でも、「アニステーミ」で「復活する」ことを言い表す例はほとんどない(名詞形「アナスターシス」で「復活」を意味する用例はみられる)。「マルコ」が「アナスターシス」を「復活する」の意味で意図的に用いているとすれば、日課箇所主イエスを訴える者たちや大祭司がこの用語で「立ち上がって」と描かれるのは、示唆的である。すなわち、「マルコ」にとって「復活する(アニステーミ)」とは、誰かの前に立って語りうる者となることであり、弟子たちの前から奪われた(弟子たちが見捨てた!)主イエスが再び彼らの前に立って語り始めるようになられることこそが「復活」の意味するところなのだという「復活論」を示唆していると考えられる。

・61 節「メシア」は、ギリシア語「キリスト」(=「キリスト」)。
62 節「そうです」は、ギリシア語「エゴ・エイミ」。

来週の誕生日 (10 月 11 日～17 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-16「われらの主こそは」(= I 15「我らのみかみは」)は、19 世紀英国の文筆家 J.コンダーの詩集の中から讃美歌に採用された歌詞で、黙 19:6 に基づく。曲は、18 世紀英国の長老派牧師レーエフ・ハリソンによる聖歌集に収められたものの一つ。
- ・21-507「主に従うことは」は、19-20 世紀米国メソジスト派牧師グラント・タラーの作詞作曲。孤児として育ち学校教育をほとんど受けないまま 19 歳で牧師になり、ソングリーダーとしても活動。日本語版は、1923 年版『日曜学校讃美歌』から継承。
- ・21-510「主よ、終わりまで」(= I 338)は、19 世紀英国教会の司祭ボードがこどもたちの堅信礼のために作詞したもので、1954 年版からは改訳されている。曲は、19 世紀英国教会のオルガニスト・アーサー・マンの作曲。現代の英米圏諸教派でもっとも広く採用され続けている讃美歌の一つ。

21-16「われらの主こそは」**The Lord is King! Lift Up Thy Voice**

1. The Lord is King! lift up thy voice, / O earth, and all ye heavens, rejoice; / from world to world the joy shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'
2. The Lord is King! who then shall dare / resist his will, distrust his care, / or murmur at his wise decrees, / or doubt his royal promises?
3. He reigns! ye saints, exalt your strains; / your God is King, your Father reigns; / and he is at the Father's side, / the Man of love, the Crucified.
4. Alike pervaded by his eye / all parts of his dominion lie: / this world of ours and worlds unseen, / and thin the boundary between!
5. One Lord one empire all secures; / he reigns, and life and death are yours; / through earth and heaven one song shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'

21-507「主に従うことは」**In his steps I follow**

1. "In His steps" I follow as I go / On my pilgrim journey here below, / "In His steps" I follow day by day, / Trusting Him to lead the way.
- [Chorus] Gladly in His steps I follow I follow I follow, / Gladly in His steps I follow, / Gladly in His steps I go.
2. "In His steps," what peace and joy I know, / Every day my path doth brighter grow, / "In His steps" His spirit dwells within, / Cleansing me from every sin. [Chorus]
3. "In His steps," I prove His matchless love, / While He leads me to my home above, / "In His steps" tho, pressed by every foe, / I shall conquer all, I know. [Chorus]
4. "In His steps!" how sweet to walk with Him, / Even tho, clouds my pathway often dim, / "In His steps" His smile illumines the way, / And my night is turned to day. [Chorus]

21-510「主よ、終わりまで」**O Jesus, I have promised**

1. O Jesus, I have promised / to serve thee to the end; be thou forever near me, / my Master and my friend. / I shall not fear the battle / if thou art by my side, / nor wander from the pathway / if thou wilt be my guide.
2. O let me feel thee near me! / The world is ever near; / I see the sights that dazzle, / the tempting sounds I hear; / my foes are ever near me, / around me and within; / but Jesus, draw thou nearer, / and shield my soul from sin.
3. O let me hear thee speaking / in accents clear and still, / above the storms of passion, / the murmurs of self-will. / O speak to reassure me, / to hasten or control; / O speak, and make me listen, / thou guardian of my soul.
4. O Jesus, thou hast promised / to all who follow thee / that where thou art in glory / there shall thy servant be. / And Jesus, I have promised / to serve thee to the end; / O give me grace to follow, / my Master and my Friend.